

Title	吳市の前面、その経済形態の特相
Author(s)	西龜, 正夫
Citation	地球 (1932), 18(3): 189-195
Issue Date	1932-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/184081
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

(第五圖)。橄欖石は角閃石の量より遙かに少く
割目に富み屢々特有のケリファイチック構造を有

する。(完)

吳市の前面、その經濟形態の特相

西 龜 正 夫

吳市の前面には江田・能美・倉橋の三島十二個
町村がある。この中能美島の北部にある三高・
高田・沖の三村、江田島の北部、及び倉橋島の
南東部は位置の關係上吳市との關係があまり密
接でないが、その他の部分は何れも吳市と相對
して居て、一種の接續町村の景觀を呈してゐる
そこでこれ等の町村に於ける經濟形態を觀察す
るのも興味深いことであらうと考へてこの小文
を草することにした。

地形と人口密度

統計を見て第一に驚くことはこの地域の人口
密度の大なることであり、更に實地に臨んでそ

の地形のあまりにも峻峻で平地の乏しいのに再
び驚きを加へないものはあるまい。計算によれ
ば一方里の人口概ね六千乃至八千人で、倉橋島
村(吳市に關係薄き多くの部分を含む)の四千
六百六十人を最低とし、音戸町の一萬六千二百
人を最大とする。(内地平均二千四百人)都市と
稱すべき部分の殆ど無い村落ばかりでこの稠密
さを見ること、他にあまり例の無いことである。
而もこの地域は周知の如く開橋準平原の沈降
したものであつて、その海岸には殆ど全く沿岸
平野なるものを見ることが出来ないし、地域が
狭いから大きな川もなく、随つて河谷平原や三

角洲の見るべきものも無い。聚落の存在する處は斷層海岸に僅かに人工によつて築かれた帶狀の埋立地か、然らずんば斷層崖下に一段低く出來た陷落丘陵群の表面、海拔五十乃至百米の緩斜地である。

人口密度といふものを、殆ど經濟價値なき急斜地面にまで押しならして計算することが何を意味するかは暫く別問題とするも、若し耕地となり得る限りの面積を基礎として人口密度を計算したならば、この地域の密度は蓋し驚嘆に價する數字を出すことであらうと思ふ。

人 口 構 成

この驚くべき人口が何によつて支へられてゐるかを見んために、先づ人口の構成を調べて見よう。この地域の人口を性別に見る時は概して女子の數男子に超過し、たゞ深江・中・倉橋の諸村に男子が超過するのみである。尤も江田島の男子が女百に對して百七人八分となつてゐるのは、海軍兵學校があるためであつてこれは特例

と見ねばならぬ。大柿村に紡績工場のあることは幾分女子を吸収して居るであらうと思ふが、要するにこの地域では男子が多く他地方に出稼ぐために消極的に女子の數が多くなつてゐるのであることは、各町村の寄留簿について親しく調べた結果から推定するに難くない。更に年齢構成を見ると、十五歳以上五十九歳以下の生産年齢の%は左表の通りである。

表 一 第

町 村	生産年齢%
高 田	45.7
中 川	46.2
鹿 高	47.9
三 高	47.2
沖	46.3
深 江	46.7
大 柿	50.2
飛 渡	44.5
江 島	51.7
音 戸	50.5
渡 子	48.5
倉 橋	48.4
内 地	54.8

第一表 (大正十四年)

即青壯年者が如何に多く出稼してゐるかを推察することが出来る。それは本籍人口と現住人口の差に於ても明瞭に表はれてゐるが、實地に

就て見聞する處によると多くは京阪及び關門地方に出て商業若くは勞働に従事してゐるそうでは飛渡瀬村の様に一戸平均一人の船員を出してゐる村もあり、又渡子島村早瀬部落の様に非常に多くの帆船を有して運賃積に活躍してゐる村もある。

たゞ前表について注意すべきことは、兵學校のある江田島と紡績工場のある大柿と、吳市に最も近い音戸町とが五十人を超えてゐることである。

生産狀況

戸數の職業構成を見ると農業は概ね七〇乃至八〇%を占め、水産業は三高村の二五・六%、音戸町の一六・八%が著しく、工業は大柿町の二四・二%、渡子島の二五・二%等稍見るべく、商業は大柿の二一・九%、音戸の一五・九%、交通業は渡子島の二〇・九%を最大とする。而して江田島の公務自由業が二五・六%に上るのは一異例である。

斯く農業を主業とする地域であるが、その耕地面積は一戸平均一反二畝四分(音戸町)乃至四反二畝四分(中村)で、全縣の平均二反五畝四分に比べて必ずしも少くない様であるが、さてその耕地と云ふのは頗る貧弱なもので、水田と云へば小さな刻谷の底の僅かな泉を水源とする沼田であり、それも極めて少くて大部分は畑であるが、それが概ね傾斜二十度から三十度、時として三十五度を超え四十度にも近い急斜面に、何百といふ階段を作つた所謂棚畑で、高距も百米内外に及んで作業の困難推測するに餘りがある。實に耕用牛馬の如きは使役し得る區域極めて僅少で、肥料や收穫物の運搬にも殆ど全く人肩のみが用ひられてゐるのである。随つて一町歩平均の生産高を調べて見ると五百三十圓内外に過ぎない。三反五反の畑を耕すのも如何に困難であるか、而してその收益の如何に少いかと見るとき、誰か氣の毒の感を起さないものがあるらう。

併し農業生産力は必ずしも土地の面積にのみ

比例するものではない。勞力が多いならば集約的に土地を利用していくらでも生産力を高めることが出来る筈である。そこで農業様式に就てもつと觀察する必要がある。

吳市の郊外的地域である以上は、野菜の生産に於て見るべきものがある筈である。ところが實際を見ると頗る期待に反し、促成栽培の如きは殆ど何處にも行はれて居ない。江田島の小用では却つて吳市から各種の野菜を逆輸入してゐるのを見た。渡子島でも音戸でも野菜と云へば自家用の域を脱して居ない。飛渡瀬で僅かに玉葱を栽培して居たのと倉橋島の南部で自然の氣候の良好なのを利用して苜を相當早く生産して居たのとが、僅かに目を惹いたのみである。江田島には大根の産が多いが、それは多くは澤庵漬として廣島市を始め阪神方面まで賣り出してゐるので、吳市との特別關係とは見られないのである。

尤も江田島及び倉橋島に於ては當局者に於て相當獎勵をしたので、吳市を市場とする野菜裁

培が數年前から稍盛になつた。それで農民は毎日新聞紙の記事に注意し、吳に軍艦の入港するといふ記事を見ると、すぐに畑へ採集に出掛けるといふ様に、機敏なこともやつて居るが、一昨年あたりからの大不景氣に野菜が暴落したので、倉橋島の室尾附近では野菜を船に乗せて吳市に送つたら、賣上高で運賃を支拂ふことが出来ないので、一人十八錢宛出し合せて償つたといふ話があり、江田島の小用では白菜を採集して賣れば人夫賃も出ないからといふので、悉く畑に鋤き込んで肥料にしたといふ話もある。

思ふにこれは他の野菜生産地との競争に敗れてゐるのであつて、その敗れる原因といふのは技術の不進歩、研究の不足にもよるであらうけれども、一面には花崗岩の浸蝕面であるから土壤が淺く、土地が傾斜して居て肥料が流失し易い等の自然の不利益があるからではあるまいか渡子島の如きは吳市に最も近いけれども、北面の地であるために野菜の出來が殊にわるい様に云はれてゐる。

近年果樹の栽培が稍勃興しかけた。これは瀬戸内海島嶼一般の傾向と云つてもよいが、傾斜地は樹栽農には最も適してゐるのであるから、販路さへ開拓すれば成効は疑ない。無論これは吳市ばかりでなく、もつと全國的否世界的に市場を考へねばならぬことである。

生産外収入

人口は多い、そして生産力は貧弱である。渡子島の如きは一人平均の生産力が四十三圓しかない。その他も多くは八九十圓から百四五十圓までである。それでどうして生活が維持して行けるだらうか。生活の程度がそれほど低いかと云へば、決して他町村に比べて劣つて居ない。否本陸部よりも却つて有福乃至贅澤な生活をしてゐる。その聚落の模様を見てもその服裝の模様を見ても。

例へば倉橋島尾立の様な純農村でも、家は七割までが瓦屋根であり、一世帯平均の所得税額僅かに二十二錢の渡子島でも、近々數年間に新

吳市の前面その經濟形態の特相

築せられた家が片つぱしから數へられる。大柿町は名ばかり町の農村であるが、その常設劇場は月に十日も空く様なことは無いといふ。

これは生産外の収入があるからに相違ない。沖村では米・織物類・肥料等の移入高が年約十五萬圓で、生産品の輸出高は十二萬圓、結局三萬圓の入超であるが、他地方出稼者の送金と海運の運賃とが約六萬七千圓であるので、結局三萬



七千圓づゝは資産が増加すると云つてゐる。沖村は吳市に關係の薄い村で、その出稼と云ふも主として阪神と關門に限られてゐるのであるが吳市に面する方面にもこれに類することが無くしてはならぬ。

そこで各町村各部落から吳海軍工廠に通勤す

第二表

町 村	年 收 (圓)	人口一人
		宛年収入 (圓)
高 田	—	—
中	10.000	3.80
鹿 川	50.000	14.40
三 高	—	—
沖	—	—
深 江	65.000	29.80
大 柿	400.000	41.60
飛 渡 瀬	80.000	45.60
江 田 島	380.000	25.60
音 戸	1.000.000	82.30
渡 子 島	300.000	71.90
倉 橋 島	50.000	3.15

第二表 吳通勤職工收入

職工の數を調べて見ると圖の様になつてゐるこれは昨年秋の調べであるから、今春の職工整理で幾分減少したには違ひないが、大體の趨勢には大差ないであらう。これ等の職工が持つて歸る金高は、大體一人一ヶ年千圓内外であるから、これをその町村の人口に割り當て、見ると上表の様になる。

即ち吳市に最も近い音戸町及び渡子島の収入は最も多く、大柿・飛渡瀬等がこれに次でゐる江田島が割合に少いのは北部に僻遠の地を含んでゐると、兵學校の職員生徒が多數に上るからであつて、こゝでは兵學校職員の俸給や學校の經費等を生産外収入として計上せねばならぬ譯である。而して渡子島の如き最も生産の貧弱な村が最も多くの収入を有することは面白い事實で、平均三戸に一人の職工を出して居るが、職工の収入は一人千圓内外であるから多くは所得税を納付しない。そこで税額は頗る低いが聚落の景觀は最も有福に見えるわけであり、貧富の懸隔もこの村が最も少いと云はれてゐるので

ある。

要 約

これを要するに吳市前面の諸島嶼は著しい人口過飽和の地域で、年々他地方に出稼するものが多いにも拘はらず、尙その住民は自らその地域内の生産を以て生活を維持することが出来ない。これ一に自然力の瘠薄なためであるが、たゞ位置に恵まれて吳市に近い町村は、勞力を提供して収入を得、これをその生活の助けとして居ることが多大である。故に工廠の仕事の多く

なると少くなるとは、直ちにその生活に影響を及ぼすわけで、市に對する勞力供給地域といふことが、一種の郊外町村としての特質なのである。

或小學校長の談によると、尋六の生徒の目標とする處はよい中等學校に入らうとすることではなくして、工廠の採用試験にパスすることである。故に尋六の教育は常にこの採用試験準備の意味が濃厚であると。特殊の經濟事情は教育にも一特相を與へてゐるのである。(完)

佐賀縣の自然地理

(四)

堀 米 次

海岸 此の地帯の海岸は、前述の如き原因にて複雑なる鋸齒狀の沈降海岸を形成してゐるがその中唯唐津灣のみは灣型を異にしてゐる。次にいさゝか唐津灣の自然地理的な方面を記述し

てみやう。そして順次南方の小灣に及び最後に伊萬里灣をしらべてみやう。

廣義に言ふ唐津灣は、其灣内に横たはる大島によつて二分されて其の西灣の方を特に唐房灣トウボウワン